

< 県研究主題 >

学習指導要領の内容を踏まえた 教育課程の編成と教育活動の工夫・改善

提案 1

提案者 鈴木 隆夫 (中地区)

< 研究主題 >

学力の向上をめざして

— 地域や児童の特色を踏まえた取り組み —

1 提案内容

地域や児童の特色を踏まえ、その特色を踏まえた現在の取り組み、課題と今後の取り組みの方向性について

(1) 学力向上につながる取り組み

①校内連携

ア 子どもたちの居場所

・国際教室、ひまわりルーム（個別学習支援）、保健室、横内級（特別支援学級）、なかよしルーム（教育相談）、職員室といった場所が本来の役割のほか、支援を必要とする子どもたちの一時的な居場所（避難場所）になり、学校全体で子どもたちの困り感に対応している。

イ 国際教室

・多文化共生の学校づくりをめざす中で、学力向上や人間関係作りなども行っている。

ウ 個別学習支援（ひまわりルーム）

・学力や対人関係の取り方などを身につけさせるとともに、学級への帰属意識を高めることもねらっている。

②授業改善

ア 校内研究

・子どもの自主性や子ども同士の関わり合いや学び合いを大切にしながら「確かな学力」の育成をめざした授業づくりに取り組んでいる。

イ 総合的な学習の時間での実践

・調べたことをオールフレンドフェスティバルで発表し、子どもたちはいろいろな国とのつながりの大切さを学んだ。

ウ 基礎基本習得タイム

・週 2 回、朝の時間に 10 分間を設け、国語と算数の基礎基本を学習している。

エ 家庭や地域、学校との連携

・生活習慣、学習習慣、地域との連携、宿題教室、学校相互連携

オ 職員会議

・児童指導と児童支援について、各クラスからの報告を会議の冒頭で報告し、より共通認識を深めることができた。

カ 子どもを支える

・朝遊び、ひまわりルームでの遊び、様々な活動（ドッジボール大会など）

（2）課題と今後の取組

- ①校内連携…職員が諸課題について共通理解し、その解決に向けて連携を図りながら取り組む。
- ②授業改善…授業の改善や教材・教具の検討を行う。
- ③学習技能・学習習慣の定着…基本的な学習技能や学習習慣をしっかり身に付けさせていく。
- ④活動の工夫…文化的な活動を取り入れて、言語能力を高める。
- ⑤家庭や地域・学校との連携…家庭や地域、中学校との連携を深め、児童に学習習慣や生活習慣を身に付けさせていく。

2 協議内容

地域や児童の特色と踏まえた教育課程の編成

- 国や宗教の違いなど一斉指導の中で、日本の価値観等指導の難しさや苦勞していることは。
→基本的には日本の習慣で実施している。難しい場合は、個々に対応している。
- 学校からの通知等は母語に訳しているのか。
→漢字には全てルビをふって配付している。訳してもらうこともあるが、直接電話をして理解してもらっている。メールは、全文平仮名と漢字交じり文の2種類を同時配信している。
- 読書活動の充実をはかっているが、国語力のばらつきがありその指導法は。
→基本的には同じだが、無理な児童には、国際教室にある外国の本を貸している。
- 取り出し指導する児童が増えてきているが、その対応は。
→担当教員が2名おり、担任と連絡を取り合って指導している。ひまわりルーム・国際教室の2つに通っている児童もいる。
- 学校のかかえる課題（弱み）をいかに特色（プラス）にしていったのか。
→10年前からの取り組みで変わってきた。ひまわりルーム・国際教室など上手に協力し連携している。何かあれば職員全体で取り組む協力体制が自然にできあがっている。

3 まとめ

（1）国際教室について

- ・横内小学校の、多文化共生の学校づくり・子どもたちの特性を認め合い、学力向上をめざしている価値ある取組が素晴らしい。
- ・全国的に日本国籍だが日本語指導が必要な児童が増えてきており、神奈川県は外国籍在籍数が全国2位である。
- ・文部科学省 情報検索サイト「カスタネット」を活用してほしい。

（2）弱み（課題）を生かして特色にする

- ・校内の連携を大切にし、常に課題について共通理解をもち、連携して取り組んでいる。
- ・子どもたちの意欲を支え、多様性を認め合うことが、横内小学校の先生方の根底にあるので、様々な取り組みが点になり線になり効果を発している。

＜研究主題＞

学校の特色を生かした教育課程の編成と教育活動の工夫・改善

1 提案内容

特色ある学校教育を実践していくためには、学校目標を踏まえた上で教育課程編成の方針に沿って計画を立てていく必要がある。相模原市立藤野小学校では、学校教育目標を受けてめざす児童像を掲げ、それに迫るために、2つの特色ある教育活動とそれを下支えするための取組を行っている。

(1) 読書活動を通して、確かな学力を育むために

- ① 読書活動を通して、読書習慣の定着を図り、豊かな感性と読解力、思考力・判断力・表現力の育成を図る。
- ② 藤小ブックショップの活動を通して、豊かな感性や心を育むと共に、自ら考え、判断し、表現する力を育てる。

(2) 豊かな人間性・人間関係を育むために

- ① 異学年との交流を通して、相手を思いやる心を育て望ましい人間関係づくりを図る。

(3) 家庭・地域との連携の充実

- ① (1) (2) を下支えするものとして、学習協力者、地域協力者、PTAなどとの連携を深め、地域の連携力の充実と活用を図る。
- ② 読み聞かせボランティア・図書館づくりボランティアの方々と連携し、読書活動の充実を図る。

2 質疑・協議内容（協議の柱：学びの連続性を図るための教育課程の編成）

(1) 図書ボランティアが資料のファイリングをしていることについて

教員が選んだ小学生新聞の記事を切り取り、パウチする。それをジャンルごと（歴史、植物、環境など）に分類し、調べ学習等で活用できるようにしている。

(2) PTA会費で購入するほかに、学校の予算でも図書の購入はしているのか。

学校の予算でも購入している。また、卒業記念品は図書。最近では、子どもたちにとって近い存在となっている有名スポーツ選手の伝記などを取り入れている。

(3) 図書整理員とはどのような人なのか

年間90日、1日6時間勤務の職員。図書室に常駐していて、図書整理や調べ学習の補助（参考となるような本を見つけるアドバイス）、夏休み図書貸し出し期間にはアドバイス等、配置計画を立てながら運用している。

(4) 「読みの質が高まる」とは

成果物の内容が高まる。文字量が多くななくても、伝えたいことや重点がおさえられていて、内容を表現することができる。読み取りが深くなる。学年相応の本に出会わせる必要がある。文字に慣れることで、長い文章でも心が折れる子が少ない。

(5) 年間で100冊近く読む児童について

夏休みにも図書室を開放していて、毎日利用している児童もいる。「おめでとう！」と表示されるソフトなどがあり、それが励みとなっている児童もみられる。未読児童もちろんいるが、全校児童の約1～2%にすぎない。

3 助言（大西 正康 校長：横須賀市立長浦小学校）

平成20年から6年間、1年ずつ着実に考え方に深化がみられた。さまざまな制約や児童を取り巻く不安もあった中で、先生方の子どもに向けるまなざしから校内研究として読書活動を選んだ着眼点は鋭い。仮説に信頼性がなければ、実行していく勇気はわからない。今、学校図書館を活用することにおいて、追い風が吹いている。人がいない学校図書館に、授業のサポートもできる司書教諭の配置がなされたことは進歩であった。今後、事務等を担う学校司書が配置されることで、本当の意味での活性化といえる。図書ボランティアが普及してきてはいるが、学校図書館運営のイニシアチブは学校にある。読書センターと学習情報センターの両機能が充実することで、学校図書館の充実といえる。培ったコミュニケーション能力を幼小中の連携に活用したのは素晴らしい。小学校6年生と中学生とのビブリオバトル（知的書評合戦）や、幼稚園・保育園と小学校低学年とのアニメーションもやってみるとおもしろいと思う。

4 研究協議

（1）連携

職員間の連携がよりよい教育活動につながる。担当がそれぞれ仕事をするのではなく、同じ学校目標のもとでのチームワークが大切となる。また、学びの連続性においても、幼保小中が連携を図ることが大切である。幼保小中にとどまらず、地域や家庭との連携も大切である。地域と共同しての取り組みにおいても、地域の思いも大切だが、活動のねらいがあることを学校から発信し、共通理解を図ったうえで取り組むことが望ましい。

（2）スタンダード

型にはめるのではなく、職員の声を生かして作ることが大切なのではないか。そして、何らかの形で子どもたちに投げかけていく必要があるのではないか。スタンダードを抛り所にしていきいきとした学校づくりをしていきたい。また、小中連携してスタンダードを作成することで、統一した指導ができるのではないか。スタンダードを生かすためにも、子どもたちに活躍の場を設定することが大切である。学校規模や地域柄、特色は様々であるが、子どもたちとていねいにかかわっていくことを大切にしたい。

（3）共通理解

一人で抱え込まない、協力して当たり前という出発点が共通理解を深める。みんなの考えをシェアする場の確保と、みんなでやりたくても足並みがそろわないことについては努力が必要である。特色を生かした教育活動を継続することで、主体的な学びが培われる。また、目標やねらいをしっかりと見据え、それに向かって共通認識をもって取り組むことが重要である。さらに、ねらいへの振り返りも怠らず、学校一丸となって取り組めることが素晴らしい。

5 全体まとめ（市川 昌樹 指導主事：神奈川県教育委員会子ども教育支援課）

学校の中で共通理解を図りながら、先生方が連携して教育活動にあたっていく姿があぶり出せた。また、多様性を認めるというところにポイントが置かれていた。いろんな人が紡ぎ合っただけの強い布のようなしなやかな学校をつくっていると感じられた。学習指導要領の「教育課程編成の原則」に則りながら、教育活動を進めていることを実感できた。未来を生きる子どもたちのために今回の実践提案で報告されたことから学びながら進めていきたい。

子どもたち自身が、自分が何を学ぶのか、何を身に付けたのかを理解することで主体性が育まれていく。今後も、学力の三要素が引き続き大切にされていくことには変わりがない。今、それぞれに考えながらチームで取り組まれていることを大切に進めていってほしい。